はじめに

平成８年２月、当時学長でおられた故斎藤秀晁先生に「住宅の研究を始めたい」と申し上げると大変驚かれた。言い出した当人の専門は臨床生化学である。しかし「やめなさい」とは言われなかった。次に当時の副学長的立場でおられた桑野タイ子学科長にも申し上げると、看護教員の中から、住宅研究に適任で実力のある水戸美津子先生を紹介して頂いた。水戸先生から「環境」の言葉を入れた「快適住まい環境研究会」との研究会名を考えて頂いた。そこに解剖生理学の関谷伸一先生が加わり、次いで３月には山際和子先生と桑原（現西脇）洋子先生が加わった。こうして新潟県立看護短期大学内で「快適住まい環境研究会」が誕生したが、建築の専門家ではない看護と基礎科学の人間による無謀とも思える船出であった。

平成８年５月に第 1 回「快適住まい環境研究会フォーラム」を開催し、新潟大学の五十嵐由利子先生に講演をお願いした。このフォーラムが契機になって、参加した学生の中から自主的に研究会の「学生部」が立ち上げられた。そして学生の感性で「快適住まい環境研究会」の略称が「住ま研」となり、以後もっぱら「住ま研」が定着した。住ま研学生部の誕生経過は本書の「住ま研学生部の歩み」に記述されている。

人の健康と住まいとの関係は、今も昔も重要と考えられている。ナイチンゲールの代表的著書「看護覚え書」では、看護の第一の原則は「室内の空気を戸外の空気と同じにきれいに保つこと」と述べている。人の健康を維持するには住環境が重要であるとの指摘が、その時代の、今から 150 年もの前から言われてきた。

現代は昔以上に「住まい」が重要になっている。我国では 2010 年になると、65 歳以上の高齢者の約 70%が一人住まいか、高齢者同士の二人住まいになると予想されている。そして高齢者のほとんどは「自分の家で最後まで暮したい」希望を持っている。しかし、その住みみ続けたい住宅の多くは、段差が多く、冷暖房、トイレ、浴室の位置や構造に問題がある場合がほとんどである。

このような社会背景の中で、「全ての人の自立生活が可能のように」、また「誰もが安心して生活できる住まい環境のために」のスローガンのもとで住ま研の研究活動が続けられ 7 年間が経過した。隔月毎に発行している「住ま研ニュース」の送付先は県内外で 120 人になったが、これらの大勢の方々から「住ま研」が支えられ、多肢に渡る研究活動が続けられたことに深く感謝申し上げたい。ここで今までの研究活動を総括し、今後の発展につなげるべく、住ま研幹事の関谷、佐々木、小林（恵）、斎藤、水戸の大学教員と室岡建築士、住ま研学生部であった水嶋保健師（第三期生）と住ま研在学生とで本書をまとめた。

（新潟県立看護大学教授　住ま研代表　杉田　収）